



モンゴルの 衝撃

パスパ字の制定

—モンゴルの文字政策

松井 太 (まつい だい)

■ウイグル字の導入と利用

モンゴルが帝国支配のために使用した文字としては、いわゆるパスパ字が有名である。しかしモンゴルが初めて支配手段として採用した文字は、天山山脈東部地方に拠るウイグル王国で用いられていたウイグル字であった。

一二〇四年、チンギスハカンはアルタイ山脈に拠るナイマン国を滅ぼし、その際に捕らえたウイグル人タタトンガを通じて、ウイグル字による文書記録や印章の利用などの文書行政システムを導入した。その後ウイグル王国自体が国を挙げてモンゴルに投降し、多数のウイグル人が政府のビチャクチ(書記官)やチンギス家の子弟の家庭教師に採用された結果、帝国中枢部の文書行政は専らウイグル字によ

って行われた。モンゴル支配層における命令伝達にもウイグル字文書が用いられ、チンギスが定めた「ヤサ」と呼ばれる法令もウイグル字で書き残されたと伝えられる。

ところで、高校世界史教科書の「モンゴルが征服地域においてモンゴル語を公用語とした」という記述は、しばしば被征服者がモンゴル語を強制されたかのような誤解を招く。しかし実際には、遊牧モンゴル支配層の多くがモンゴル語以外の諸語を解さないという事情に対応したに過ぎない。支配層がモンゴル語で発した命令は、文書化されて伝達・公布されるにあたり、例えば中国方面なら漢語、イスラーム圏ならアラビア字ペルシア語というように現地語に翻訳された。必然的に、行政機構内ではモンゴル語と現地

語とを通訳する技能が重視され、帝国の東西を問わずモンゴル語会話とウイグル字書写術とを習得した現地民が通訳官として採用された。彼らの多くは中・下層民の出身であり、中国士大夫やムスリム学識者（ウラマー）など伝統文化にこだわる旧来の知識人層に代わってモンゴル為政者の要求に応え、高位高官に昇進する者も現れた。ウイグル字モンゴル語の「公用化」は、社会の底辺にあつた人々に新たに立身出世の足がかりを与えたともいえるのである。

■パスパ字の制定

第五代モンゴル皇帝クビライはチベット仏僧パスパに命じて「蒙古新字」を創製させ、一二六九年にこれを「国字」に制定した。これ以降の元代史料中の「蒙古字」ないし「国字」こそが、今日パスパ字と呼ばれるものである。

パスパ字制定の理由については、従来、モンゴルが独自の文字を有していないことにクビライが劣等感を抱いたかなどと説明されてきた。しかしながら、この点はパスパ字制定前後にクビライが怒濤の勢いで推進しつつあつた「新国家建設政策」をおし眺めて再考する必要がある。すなわちパスパ字制定二年前（一二六七）には大都の建設、

その翌年（一二六八）には南宋接收作戦が開始され、パスパ字制定の翌年（一二七〇）には各諸王家も含めた文書行政の統一・定式化が指示されている。さらにその翌年（一二七二）に新国号「大元」を採用したことは周知の通りである。パスパ字制定はこれらの新政策連発時期のまさに中間になされており、明らかにクビライの「新国家建設政策」の一環をなすものであつた。導入から半世紀以上を経て帝国全域に浸透していたウイグル字に代え、クビライがあえてパスパ字を創製・制定したのは、制定すること自体に新国家建設の決意表明という意義があつたのである。

■パスパ字の普及状況

現存するパスパ字モンゴル語資料の多くは、皇帝・皇族・将相が発した免税特許命令や官印・牌パイ（身分証）など政治的資料が大多数を占め、民間で取り交わされた契約文書などは確認されていない。実際の使用とは無関係に政治的意図をもって創製された以上、このように政治的なものに偏って遺存するのも当然ではある。

また政府としても、パスパ字の普及に本格的に力を入れなかつたようである。そもそもクビライがパスパ字制定の

際に発した詔勅では、パスパ字使用は「璽書」つまり皇帝の発する文書に限定し、その他の公文書は従来通りとされている。元政権のモンゴル語公文書についてパスパ字の使用が徹底されたのは制定から約十五年を経た一二八四年頃のことである。しかし政府内部ですら、パスパ字使用がどれほど徹底されていたかは疑わしい。当時の史料中には「パスパ字モンゴル語で書くべき文書なのに、実際にはパスパ字で漢語を音写している上、誤字まである」「漢人官吏はパスパ字を学習しようとせず、学習するのはウイグル人やムスリムばかりだ」など、パスパ字が普及しないゆえの問題・対策がしきりに記録されている。また、ある王家が発行したパスパ字モンゴル語免税特許状では、本来左から右へ行を進めるべきところを漢文と同じく右から左へ行を進めており、「正しいパスパ字の使い方」の不徹底ぶりを表している。現在確認される限りでは、制定者クビライ自身が発行した命令文書でも、そこに捺された玉璽の印文はパスパ字ではなく「御前之宝」という漢字であり(図1)、その後の歴代皇帝もこの漢字玉璽を襲用した。ジョチ・チヤガタイ・フレグの西方三王家はもとより、元治下でも中央政府に直属しない諸王家の多くは、依然としてウイグル

字によって種々の文書を発行し続けた。これは現代の縦書き「モンゴル字」がウイグル字を継承していることからも示される。

■パスパ字の意外な伝播

とはいえ、パスパ字はほとんど普及しなかつたと単純に割り切れるわけでもない。元代中国で私信の末尾に用いられた封印にはパスパ字印文を用いたものが多数現存している(図2)。目を遠く西方に転じれば、十四世紀後半のチャガタイ家当主はパスパ字トルコ語の公印を用いていたし、フレグ家の有力将軍もパスパ字モンゴル語公印を使用していた例が残る。またウイグル王国の中心地トルファン盆地からは少数ながらパスパ字のモンゴル語・トルコ語文献が出土している。中にはパスパ字にウイグル字で「ルビ」をふった文字表もあり、ウイグル人が熱心にパスパ字を学習す

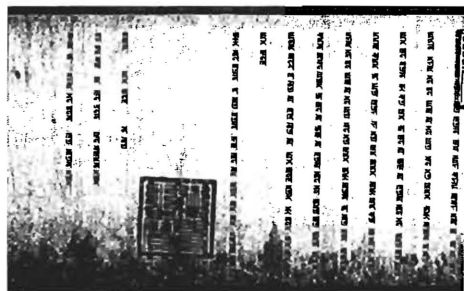


図1 クビライ発行命令文書の現物(前半部)。パスパ字の基礎となったチベット字は横書きだが、パスパ字はウイグル字と同じく縦書きで左から右へ行が進む。



図3 「奇跡の集成」にみえるクビライの「遺訓」。パスパ字モンゴル文に続きウイグル字トルコ語訳が記されている。横書きなのはペルシア語にあわせたため。



図2 元代中国のパスパ字封印。中下のものはパスパ字「gi」で「記」を表す。右下は持ち主の姓「陳」に続けてパスパ字「gi」が刻される。

るさまを彷彿とさせる。十五世紀のペルシア語写本『奇跡の集成』に残る一節のパスパ字モンゴル語(図3)も興味深い。内容は、クビライが臨終に際して子孫に説いた帝国統治の心構えである。英主クビライの「遺訓」がパスパ字モンゴル語で記録されて各地のモンゴル政権に届けられ、後代にまで伝承されているのである。

さらにパスパ字は図像的モチーフ・意匠としても用いられた。十四世紀イタリア・アールネサンスの画家ジョットはパスパ字を図像化した紋様を頻繁に用いた。ジョットのパトロン

だった当時のイタリア商人にとってモンゴル支配下の東方は重要な市場であり、その東方の象徴としてジョットはパスパ字を選んだのである。同様の例は、トゥルファン出土ウイグル語・モンゴル語文書に捺されたパスパ字公印にもみえる。それらの印文の多くは「幸いなる」というトルコ語の吉祥句であるが、中には字形を相当にデフォルメした結果、パスパ字として読めないものもある。

そもそもクビライの意図がパスパ字の制定それ自体にあったとすれば、このような用法もうなずける。前述のように、クビライはパスパ字制定と同時期に行政文書の定型化を進めたが、それは使用語彙・書式のみならず捺印方法にまで及び、文書を受け取る官吏・人民への視覚的な効果を狙ったふしがある。つまりパスパ字も「見せるため」の文字であり、これを「見た」人々は、読める・読めないに関係なく、制定者クビライとその後継者たるモンゴル皇帝の権威を感じとつたに違いない。ジョットや中央アジア住民が用いた「パスパ字まがい」の紋様も、空前のユーラシア大交流を現出するモンゴル皇帝とのつながりを誇ろうとした一種の「偽ロゴマーク」と言えるかもしれない。

(弘前大学・モンゴル時代史)